

# 琉球諸語研究の現在 ——消滅危機言語と向かい合う——

Struggling with an Endangered Ryukyuan Language:  
Creating a Digital Museum to Document Endangered Languages

田窪行則

Yukinori TAKUBO

**Abstract:** The Ryukyuan languages are the only language family that has proven to be cognate to the Japanese language. There are five to six varieties, all mutually unintelligible from each other and from the varieties of Japanese. All are endangered due to a lack of a natural intergenerational transmission of the languages. In this paper, I consider two attempts to document and preserve these Ryukyuan languages: the mutual intelligibility test as a means to test degrees of intergeneration transmission and a digital museum project as a means to document and preserve endangered languages.

## 0. 相互理解性テスト——導入をかねて

最初に、方言を聞いて体感してもらい、そのあとで「相互理解性テスト」の模擬版を受けていただきます。記入したものは持ち帰らず、私に提出してください。持って帰られてしまうと、今後テストができなくなってしまいますので。では音声聞き、話の内容がどの程度理解できたか、「0」から「10」での理解度に印をつけてください。

(全体の話の音声流れる)

今の音声を聞いてどの程度できたか、印をつけてください。今度は少しずつ聞いてから質問をしますので、それに答えてください。

(第1文の音声が流れる)

これが最初の文章です。質問は三つ。(1)最初にどんな音が聞こえると言っていますか。(2)登場人物が何人いますか。(3)登場人物は何をしていますか。実際のテストでは一つの問いへの回答に40秒ずつかけますが、今回は時間がありませんので短縮します。では、つぎの文章です。

(第2文の音声が流れる)

これが第2文。質問は(4)登場人物は何をしていますか。では、つぎの文章です。

(第3文の音声が流れる)

第3文、質問は(5)登場人物は何をしていますか。つぎが最後です。

(第4文の音声が流れる)

第4文、質問は(6)話のこの部分ではどんなことが起きていますか。

できたでしょうか。では、「話の内容がどれくらいわかりましたか。0-10に○をつけてください。」の箇所です。自己評価をしてください。

ここから先は本題に入ります。今日の予定はまず、第1部として「日本の消滅危機言語と相互理解性」のお話をします。消滅危機言語としての琉球諸語と日本語との関係、また、今行なった相互理解性テストがどのようなものであるか、どのように使えるのかを考えたいと思います。第2部は「消滅危機言語と向かい合う」。どのようにして消滅危機言語と向かい合い、それを記録して残していくか、時間があれば再生までの試みをご紹介します。

## 1. 日本の消滅危機言語と相互理解性

### 1.1. 言語の消滅とは

UNESCOでは、消滅危機言語の消滅危機度に関して指標が作られています。その指標は大きく六つあり、一つ目は皆が話しているので「大丈夫 (safe)」というものです。二つ目は「危ないかも (vulnerable)」。これはこどもの大部分がその言語を話すか、使用領域が限定されている、たとえば家では話されても外では話されない、公共性がなくなってきているという状況です。三つ目は「確実に危ない (definitely endangered)」。こどもが家庭でその言語を母語として習得していないという状況です。四つ目は「非常に危ない (severely endangered)」。祖父母やお年寄りには話しても、父母の世代が話さない。そうなることどもには伝わっていかないという状況です。五つ目の「瀕死状態 (critically endangered)」は、60、70歳以上の話者しか話さなくなり、使用が部分的で頻度も多くないという状況です。六つ目が「消滅 (extinct)」。これは話者が残っていないという状況です。

日本で話されている言語で危機度が「大丈夫 (safe)」なのは標準語だけで、「確実に危ない」ものは沖縄語、国頭語、奄美語、宮古語、八丈島語 (八丈語) です。「非常に危ない」のは八重山語、

与那国語です。ただ実際には、これらの中にも方言がたくさんあり、たとえば八重山語の中でも一部は「非常に危ない」、一部は60代以上は皆が話しているということがあります。与那国語は、現在私の仲間が調査に入っていますが、活性化の運動があり、場合によっては一つ上の「確実に危ない」に移るかもしれません。アイヌ語は「瀕死状態」のカテゴリーに入っていますが、ひよっとしたらもう六つ目の「消滅」に入ってしまったのかもしれません。現在はフィールドワークができない状況になっています。アイヌ語以外は、一般的にはすべて日本語の方言であるとされていますが、UNESCOはこれらを別の言語だと考えています。日本の研究者でも方言ととらえるか、言語ととらえるかで揺れています。

では、言語が消滅するとはどのようなことでしょうか。基本的には世代間継承が絶えるということです。親が子どもに言語を教えない、あるいは祖父母が孫に言語を教えないという状況になると、そこで断絶します。無形文化財にしても、映像記録などが残っていればそこから学んで復活させることができますが、言語獲得には臨界期があり、母語として覚える場合は子どもの時に習わなければいけないため、記録をいくら残しても継承はできません。

言語継承が断絶する原因はさまざまあり、その一つは威信言語による言語支配です。たとえば沖縄では17世紀初頭に薩摩に支配されることにより日本語が浸透し、琉球王朝がなくなって日本の県になり、その際に少しずつ日本語の教育が行われ、ある段階で完全に標準語教育が入ります。そこで強制的に琉球の島の言語を禁止し、標準語だけを話すということが学校教育として実施されました。これが威信言語による言語支配の例です。韓国を植民地化した際、公民化教育として日本語を教えたのも同じことです。台湾でも同じことをしました。この言語支配は政治的に行われるだけでなく、たとえば東京に来た人間が東京弁を話すべきであるという社会的な圧力があるとなると、これはもう一種の言語支配です。私は岡山出身ですが、大学時代に威信言語である関西弁（京都で学生が話す擬似関西弁でしかありませんが）を覚えた段階で岡山の母語話者ではなくなりかけており、現在は泥酔した時にしか岡山弁は出てきません。

また、言語の消滅の別の要因として母語の文化的価値の低下があります。方言を話す人は、方言を「汚い言葉」であるとか「価値の低い言葉」であると思う場合が多いのです。宮古で調査をしている時も、普段は方言で話してもらっていても、テレビカメラが入ると「恥ずかしい」という理由で標準語に切り替わることが何度もあります。さらに大きい要因が母語の経済的価値の低下です。我々が調査に入ると、「こんな所で方言を勉強して何の役に立つの?」とよく質問されます。多くの人が子どもに方言ではなく標準語を覚えさせたいと考えていて、これは経済価値が高いから勉強するという現在の英語教育と同じ状況となっています。

また、時代変化への適応不全という理由もあります。たとえば現在の政治状況といった話題を方言で話そうとすると、ほとんどが借用語になってしまいます。この場合、その方言は時代変化の適応をしていないということになるわけです。

そして言語の消滅の理由として現在で一番大きいのが他地域との通婚です。沖縄は本土よりも方言の差が大きく、隣の村の人と結婚すると、方言差があるために方言で話せない場合が多くあります。大阪と京都であればお互いが大阪弁と京都弁がかまわないと思いますが、岡山と大阪の人間が結婚すると、どちらかに合わせなければいけなくなります。この差がより大きくなると、たとえば標準語を共通の言語として選ぶようになり、それが家庭語になると方言が消えていく。コミュニティが広がると方言が違う地域で通婚するため、その地域のどちらの方言も話さなくなり、その地域言語が消滅することになるわけです。

画面に出ているのは「方言札」です。けっこう大きいもので、方言を使った子はこれを下げて

歩かなければならず、外すためには他の生徒が方言を使うところを見つけなければなりません。

このような形で、言語、あるいは方言が消えてなくなるということが起こります。先ほど日本語の危機度が「大丈夫」であると言いましたが、日本語の中にはさまざまな方言がありますから、それらの中にも危機的になっているものがあるかもしれません。

琉球諸語は、すべて危険な状態です。琉球諸語を北琉球と南琉球に分けると、北琉球には奄美と沖縄の言葉があり、南琉球には宮古、八重山、与那国語と三つの言葉があります。沖縄語を北の方の国頭語と沖縄語に分けて、六つの言葉があるとする人もいます。これらの五つないし六つはUNESCOによると別の言語であるということになります。別の言語とすれば、これらは琉球語ではなく琉球諸語と言わなければいけないことです。これらの言語は、日本語と祖語を共通にする姉妹語と呼ばれるもので、非常に多くの共通点があります。規則的な音韻・形態変化により別れたもので、たとえば日本語では「雨」は [ame]<sup>1</sup> と言いますが、首里では [ami]、宮古でも [ami] と言う。日本語の「花、鼻」[hana] は、首里では [ɸana] と言ひ、宮古では [pana] と言う。日本語の「星」[hoei] は、首里では [ɸuei] と言ひ、宮古では [pus] と言う。日本語の「鳥」[tori] は、首里では [tui] で、宮古では [tun] と言う。この違いはどこからきたかという、宮古の /p/ の音が元で、これが /ɸ/、/h/ に変化したと考えられています。琉球祖語から琉球諸語への変化の際、その多くで o→u、e→i、ri→i、ki→tei という一連の変化が見られます。

宮古ではもう少しややこしいことが起こります。宮古では「シラミ」のことを [ssam] と言います。これを聞いてシラミを思い浮かべるのは、想像力と言語学の知識が必要となります。同じく、「雲」は [fumu] になり、「こども」は [ffa]、「笑う」は [bara:n]、「売る」は [vvi] あるいは [ur]、あるいは [wv]。「月」は [tsɨks] となります。現在私は宮古島の池間方言が話される地域に調査に行っています。先ほど相互理解性テストで聞いていただいた池間の方言は、宮古の他地域の人にもよくわからないようです。なぜか宮古では /p/ で残っている発音が、池間ではほとんどの語で /h/ に変わっています。その理由は学者によってさまざまな意見があり、謎の一つとなっています。たとえば宮古では人のことを [pstu] と発音しますが、池間では [hitu] と発音します。また、「起こす」という日本語は宮古では [ukus] と発音しますが、池間では [ukasi] となり、[uCu]<sup>2</sup> が [uCa] と [a] になってしまいます。これも謎の変化です。宮古市街の平良地区では足のことを [pagɨ] と発音しますが、これが池間では [hazi] に変わります。「頭」は平良では [kanama]、池間では [kanamai]、「網」は平良では [am] ですが、池間では [aN] です。ちなみに、平良では海と犬は違う発音です。海は [im] と [m] で終わりますが、犬は [iN] と、日本語で書いた際の発音と同じです。これが池間では語末の /m/ と /n/ の区別がなくなるので、海も犬も [iN] で区別されません。このような変化が生じることにより、平良でも通じないような池間方言ができあがります。

では、ここで試験をしてみます。今言ったことを踏まえて、つぎの日本語は池間方言の何に対応するでしょうか。

(問題は、初級編として「さけ(酒)」「あと(後)」、中級編として「道(道)」「口(くち)」  
(正解は、さけ→さぎ、あと→あとう、みち→んつ (ntsi)、くち→ふつ (futsi))



竹富島・喜宝院蒐集館所蔵の方言札(縦17cm底5cm厚さ9mm)

問題を続けます。うい (ui) はどうなるでしょう。/o/ が /u/、/ri/ が /i/ に変化するので /ori/ からきている可能性があります。ただ、/e/ も /i/ になっているので /ue/ という可能性もあります。したがって、[ui] と言われたら日本語の「降り」/ori/ か「上」/ue/ か。他の可能性もあります。シラミの意味の「っさん (ssaN)」は、シラミ以外にももう一つ考えられます。つまり、先ほど言ったように池間では /m/ と /n/ との区別がなくなっているのので、/ssa/ を日本語に「しら (sira)」に対応すると考えると「知らん (siraN)」というのも ssaN に対応することになります。「月」は池間方言では「つつ (tsiki)」と言いますが、/ki/ が /tsi/ に対応するので、これは日本語の「聞き (kiki)」にも対応します。

では、つぎは応用問題。「ほうからす (hukarasi)」という言葉があります。これは可能性としては、[huka] は [hoko] に遡る可能性があり、[si] は [si] の可能性があるのので、日本語の「誇らし」[hokoras] に対応する形からきている可能性があります。「んーな (n:na)」は、[mi] が [n] に対応するので、逆に考えると「みんな」[minna] ということです。「ばた (bata)」は、[wa] が [ba] に対応するので [wata] (ハラワタ=おなか) です。「ぶとう (butu)」は、[wu] が [bu] になり、[to] が [tu] になるので、[woto] (夫) のことです。

おまけです。琉球祖語の [w] は宮古では [b] になるので、[w] で始まる単語はないはずですが。ところが宮古に行って最初に習う宮古語の一つは「豚」です。豚は [wa:] と言います。[buta] と関係なさそうなので、土地の人も他所から来た人におもしろがって教えたがる単語の一つです。[wa:] は [w] で始まっている。これをいったいどう考えるか。これはもう少しややこしい可能性があって、うちな一口では豚は [ʔwa] で、グロッタルストップが入る。したがって [w] から [b] への変化が妨げられた。あるいは、[ʔ] が [uwa] だったために uwa は wa: に変化しなかった可能性もある。おまけの 2 としてつぎのような例があります。[ki] は [tsi] になるので、「行った」は [ikitari] から [itsi-tai] に変化したことが予想できます。でも「行ってしまった」は、[iki-nja:N] で、[itsi-njaaN] にはならない。これはなぜでしょう。これはつぎのように考えられています。iki: という「行く」連用形に対応する宮古祖語の形式は [iki+ari] からきていると考えられています。ia は e に変化しますので、[ikeri] となり、これは itsi には変わらなかったのだと考えられます<sup>3</sup>。

## 1.2. 相互理解性テスト——言語・方言間の相互理解度の距離を測る

このような形で、日本祖語や日琉祖語、琉球祖語、宮古祖語などから規則的な変化を経て現在の変化が生まれ、この変化がひじょうに大きいため、最初に聞いてもらった相互理解性テストのように、聞いてもわからない状況ができています。しかしじつは、これは他の言語でも同じで、英語とドイツ語は、元は同じものでしたが、これが何世紀かを経て別の言語になっています。琉球諸語も古い時代に変化して、分かれて今の状態になっている。そう考えると、琉球諸語がどのくらい日本語の本土方言と異なるかということが問題となります。その答えは、先ほど皆さんも体験しましたが、「全然わからないぐらい異なっている」といえます。とすると、これは英語とドイツ語の違い、あるいはドイツ語とオランダ語の違いと同じようなことではないか、つまり日本語とは別の言語ということも考えられるわけです。これは、そもそも言語と方言とはどのようにして区別されるのかという問題にもなります。たとえばヴァインライヒ (Max Weinreich) が引いた有名な言葉に“A language is a dialect with an army and navy.” というものがあります。これはある講演で彼が聴衆の一人から聞いた言葉とされていますが、「言語と方言の差は軍隊が

あるかどうか」ということです。軍隊（あるいは国）があったら言語で、なければ方言という考え方で両者の区別は恣意的なものだといえます。

実際の問題としては、言語と方言は相互理解度と相関させることが多いのです。国と言語間の差を別にとらえるのであれば、通じるか、通じないか、という尺度が重要かもしれません。UNESCOは、最初にこの違いを相互理解度で測ったとしています。ところがその基準は、たとえば沖縄に誰か偉い人がいて、相互理解度を測ったということではなく、土地の人や研究者の印象でしか決まっていない。となると、相互理解性を客観的に見た研究がないといけません。最近、ハワイに行った際にハワイ大学のWilliam O'Grady教授に会いましたが、彼らは濟州島方言とソウル方言の相互理解性テストを行なっていました。濟州島で話されている方言は本土の人はほとんどわからないのですが、先ほどのテストを実施すると、ソウルの方は20点満点中で平均が1.5点しか取れない。プサンの人は0.5点。そう考えると、一般的には濟州島方言と言われているものの、この相互理解性の低さから同じ言語とは言えないと彼らは主張しています。

そこで、相互理解性テストを我々も作ってみようということで、彼らと共同研究をし、今年の3月にハワイに行き、話し合いをしました。彼らの作っているテストをもらい、それと同じようなスタイルで作ったのが先ほどのものです。今はパイロット版で、もう少しきちんとしないとテストには使えません。相互理解性テストの特徴は、方言間の距離を測ることにあります。この測り方にはさまざまな方法があり、言語学的にもっとも有効とされているのは、比較言語学的方法です。比較言語学的にどれだけ離れているか、近いのか、どれだけ変化があったのか、どれだけ語彙が共通しているのかを客観的に測ることができます。これは今まででも行われているものですが、それと実際に言語が同じである、異なるのか、方言かそうでないかというのは違うことです。たとえば、ドイツ語と英語は比較言語学的にはひじょうに近いものですが、全く通じないので別の言語である。それと同じように、日本語や琉球諸語でも比較言語学なことだけでは、同じ言語の方言であるのか別の言語であるのかは決められない可能性があります。たとえば、借用が多ければ系統が違ってても理解できる部分が増えます。フランス語と英語は系統関係が離れていますが、ドイツ語よりもフランス語のほうがアメリカ人が聞いてわかる場合もあるでしょう。これは英語にラテン語系の借用語彙が非常に多いためです。相互理解性テストがうまく使えれば、この尺度によって方言や言語間の距離を測って、同じ言語であるかそうでないかを定められるかもしれない。

もう一つ大事なことは、言語間継承度を測ることができるのではないかとということです。こどもが親の言語をどれくらい理解できるか、祖父母の言語がどれくらい理解できるかによって、言語間継承度を測ることができます。UNESCOの指標は研究者が適当に決めているものなので、客観的ではありません。実際に我々が現地へ行くと、UNESCOの指標とは異なる印象をはっきりと受けることがあります。だから、客観的なテストをすることで、ある地域ではまだ継承が部分的に行われているとなれば、場合によってはそれを教育によって食い止めることもできます。そういう指標とみなすこともできるので、今まで考えられていたものよりも使えるかもしれない。というわけで、William O'Grady氏らのテストに基づいてパイロット版を作成しています。これは池間方言のものですが、他の琉球諸語でも本土方言でも作成中です。メンバーは与那国語をやっている山田真寛さんという若い研究者、UCLAの岩崎勝一教授、国立国語研究所の木部暢子教授、ほかには私の学生と、琉球語関係の若い学者連中です。喜界島、奄美、沖永良部、沖縄北部、宮古の4カ所、八重山の3カ所、与那国、本土では青森、鹿児島で作成します。青森の方言は、南部と北部で違って通じないといわれています。

では、相互理解性テストとはどのようなものか。これはひじょうに簡単なストーリーでできています。たとえば梨もぎをしているところから生まれた展開を書き起こす。それを話者の人と相談しながら、エピソードが網羅されていることを確認してから読んでもらいます。ストーリーは文化的な背景が中立的なものにします。なぜそうするかというと、文化的な背景があると内容の予測ができてしまうからです。借用語が多過ぎず、内容が簡単に想像できないようにして、言葉自体を見ないといけないようにします。そして内容に関して簡単な質問をします。客観性を保証するため、他の言語に関しても同じ形式で作成するようにします。問いに答える時間も同じにして、指標として使えるようにします(2016年10月現在は、別のストーリーを使い、測り方もより客観的な方法を採用しています。)

## 2. 消滅危機言語と向かい合う

### 2.1. 消滅危機言語としての池間方言

では、話を第2部「消滅危機言語と向かい合う」に移します。先ほどからお話している池間方言の消滅危険度は「ひじょうに危ない」と「危険」のあいだです。池間方言は、池間と、伊良部島に250年前に分村した佐良浜集落、それと140年くらい前に宮古島に分村した西原部落で話されている言語です。話者は2,000名前後、基本的に50代以上です。佐良浜には10代の話者が2、3名いるという報告が私の学生からあります。系統関係を詳しく見ると、南琉球は大きく八重山と宮古に分かれ、八重山は八重山と与那国に分かれる。私は八重山は七割くらい理解できますが、与那国は100%わかりません。先ほどのテストでは0点です。ただし、言語学的にはひじょうに近いとされています。また、宮古からは多良間が分かれています。こちらも慣れないとまるでわかりません。同じく、多良間が分かれたあと、つぎに宮古から伊良部と池間に分かれます。池間の人たちは自分たちのことを池間民族と呼んでいます。池間からは池間、佐良浜、西原と分かれ、そこでの言語は互に通じます。池間・伊良部が分かれた残りの中核宮古には15から20の方言がありますが、多くの場合お互いに話していることが通じるようです。

神事は女性が執り行いますが、西原地区ではその女性たちは神くじによって選ばれ、選ばれると年に50回くらいウタキに行ってお祈りをしなければいけない。かつては10メートル四方のスペースに150名くらいが座って、お香を焚いて夕方から朝早くまでお祈りをしたそうです。場合によっては泊まり込みもあり、それを年に50回しなければいけなかった。昔は40代後半ともなれば子どもたちも独立していましたが、現在では40代だと子どもは高校生や大学生ですから、そこまではしてられないため、この祭祀はほとんどなくなりかけています。男は楽で、年に6回ほどウタキに集まってお酒を飲むだけ。まるで学校のようになっていて、ナナムイという神事をする組織に入ることを「入学」、終えることを「卒業」と呼びます。同じ年の生まれの人たちが組を作り、節目であいさつをします。私が行くと、昭和25年生まれの寅年の人たちで集まり、仲間内でお酒を飲みながらあいさつをし合う。私が行くと代表として選ばれるので、そこで池間方言であいさつをしなければいけない。このような神事をする会では、あいさつはフォーマルスタイルで行います。日常会話ではなく、講義や講演の際に用いるような言葉のスタイルです。このスタイルは先輩から厳しくしつけられるもので、またこのことが池間方言の言語の維持にもつながっています。

言語としては、孫の世代への言語継承はすでに途絶えています。したがって40代以下は聞いてわかることはあっても自分の子どもには話さない。その理由は、役に立たない、外で通じない

からです。たとえば保育園の園長先生の花城千枝子氏は方言や遊びの継承の活動をされていますが、90代のおばあちを園に招いて交流会をしたところ、こどもたちは「おばあちゃんたちが英語を喋ってるからわからない」と言いました。ただこどもなので、すぐになつてその後は方言を教わって帰って行きました。方言を話す機会は若い世代ではほとんどなくなっているため、あと20年~30年でこの言語は消滅してしまいます。これは仕方のないことで、経済的な問題などさまざまな要因が重なり合うものなので、元に戻すことはできないでしょう。しかし本人たちは残したい、伝えたいと願っているので、少しでもお手伝いをしようということで、デジタル博物館というウェブ上のホームページを作りました(www.kikigengo.jpで見られます。現在は宮古西原地区のものだけがアクティブです。)

## 2.2. 危機言語・文化の記録と維持の装置としてのデジタル博物館

デジタル博物館は、消滅危機言語・文化の記録維持の道具として使うためのものです。これは西原地区に作ったものですが、プロトタイプとして複製して、他の地域でも作るができるように設計しました。目的は、記録とアーカイブ化。オンラインメディアデータベースとして位置づけられるものです。この地区での若いデジタル世代、コンピュータを見る人たちは、まだ聞いてわかる可能性があるので、その人たちに見てもらうことが主な目的です。あとは、儀礼やお祭りを記録してマニュアルとしても使えます。たとえば、ミヤークズツという年に一度のお祭りは4日間行われますが、我々のチームで24時間分の映像記録をとり、それを45分程度に編集して解説を加えたものを老人会に渡しました。これをデジタル博物館のコンテンツとして入れています。また、言語の継承の手助けの機能も入れています。文法、辞書、会話練習帳、読本を提供して若い世代が学べるようにしています。我々の池間方言の記録は西原地区だけで750時間ほどあるので、そのうち土地の人が興味をもてるものを編集して、書き起こし字幕、標準語への翻訳字幕、解説をつけ、地域言語・文化活動の記録と保持として入れています。将来的には、琉球諸語関係資料を電子的に格納し、他の危機言語、危機方言にも応用できるように作ってあります。2009年から始めて、今の形で公開したのが2015年の3月です。

このデジタル博物館は、博物館のイメージとして作っているため、展示と倉庫のようなものからなっています。したがって、展示スペースには常設展示や特別展示がある。どうして「博物館」かと言われることがあります。一つは、我々は現地に行って記録をとり、それを研究に使いますが、論文を書くのに使うだけではほとんどのデータを死蔵させてしまいます。しかし展示するとなれば、書き起こしたり、翻訳したりや解説を加えたりという作業が必要ですから、データを充実させるためのインセンティブになります。また、もう一つは、コミュニティへのサービスです。方言を教えてもらったり、さまざまな世話をしてもらっていますから、こちらからもお返しをしなければいけない。そこで、ご自分たちや親族や友人たちの映像を見られるような形にする、あるいは若者たちがさまざまなことを学ぶことのできる教材になればよいと思い、作っています。実際に行なっていることは、儀礼や行事を記録してマニュアルを作ることもその一つです。また、地域の人たちの言語作品を展示したり、地域の人が楽しめるコンテンツを作ったりもしています。おもしろい話をしていたり、歌が上手なおばあちがたくさんいますから、それを録画して編集し、見られるようになっています。先ほど名前があがった花城園長の創作絵本も見ることができます。花城園長は童話作家でもあるので、方言で書かれたお話に、絵をつけてもらい、花城園長ご自身が朗読された音声をつけてアップしてあります。また、老人会の歌劇も見られます。140年以上前、琉球王府から命令され、池間から分村した際の西原の人たちの辛い思いを方言で宮古



高校校長だった仲間博之氏が当時シナリオに書き、地域の若者と劇にしたものです。あとはナナムイで歌われる歌や、宮古上布の織り方なども見られます。また、コミュニティサービスとしては方言教育にもなりえると考えています。フォーマルなあいさつの練習があり、敬語の練習があります。若者たちが（といっても、40代以上だったりしますが）敬語の間違いを注意されて、方言を話さなくなってしまうのを防ぐためです。

そもそもなぜ「博物館」なのかというと、保管スペースで集めたデータが死蔵しないよう、翻訳したり文化的な説明をつけて展示することによって、データ自体が充実していくという形にしたいからです。また、この博物館がもつべき特徴で一番大切なのは、ウェブ作成が専門でない言語研究者、話者が直接更新できるということです。ファイルをアップロードしたり削除したり、メタデータの作成、ページの作成や更新を自分でできないといけません。そのためには簡単なテンプレートのようなものがあって、対話式に更新できるような形にしないとダメです。最初はHTMLなどでプログラムを書いてもらいましたが、もう少し簡単に、専門家の助けなしにアップロードできるように作成しました。2006年から調査を始め、2008年から京大のホームページを作成している人たちに手伝ってもらいました。2009年からは濟州島の調査をしている人たちと共同で最初から作り直しをしました。2008年に私が設計してプロトタイプ版をスタートした際は、字幕を画面に貼りつける形式でしたが、それをパスワード管理で2009年に公開しました。ただここには問題があって、この段階では更新を研究者である私が行えませんでした。そこで2010年からは字幕と辞書を私が更新できるようにしてもらいました。それから、Word Pressというホームページを作るエディターを使って本体も私が更新できるようにしました。これにより2012年くらいまでには、大体の内容の更新を自分でできるようになりました。そこから、もう少し簡便にということで、他言語の拡張に向けて再設定をしています。また、調査地では公開についての承諾書を全員からもらい、2014年3月17日に一般公開しました。2015年の3月から新システムへ移行しています。

デジタル博物館の構成は、展示スペースの中に展示室、学習室、資料室があり、その他に収蔵スペースがあります。これは別のサーバーにファイルが格納されているということです。オンラインデータベースを別に設け、ファイルマネジメントシステムによる映像管理をし、ここにリンクづけして展示スペースを作っているというイメージです。これはYouTubeと同じではないかと言われることがあります。実際にYouTubeも使っていますが、YouTubeの問題はコピーライトを相手に渡さないといけないということです。デジタル博物館には宗教儀礼なども入っていますから、それは困るわけです。また、契約上はYouTube側で編集したり消したりできるようになっています。それはまずいので、YouTubeで使えるもの、使えないものと分けています。

問題点としては、まだ編集が限定されていることです。検索が全文一致のみでしかできません。現状は実験段階で、全面的な応用にはまだ少し時間がかかりますし、データベースとしては限定的なものです。また、残された問題として大きいのが、作ったもののアクセス数が少ないことでしょうか。YouTubeに載せたものは8,000~9,000ビューしかありません（現在は16,800）。携帯から見るができないので、小学生や中学生に届いていないということです。また、研究者目線になりすぎということもあるかもしれません。YouTubeからは「お前の動画はビューが少ない。もっと魅力的なものにするために、こうしろ」といったアドバイスをもらったりしています。サーバーの管理に費用がかかることも大きな問題です。

以上です。では、質問を受けましょう。

## 質疑応答

**質問者 1:** デジタル博物館におけるコミュニティサービスとして「敬語の練習」ができるという点がありました。私自身も調査をしていて、敬語の間違いを指摘されて若い人たちが方言を話さなくなるという実感があります。これについてもう少しお話しください。

**田窪:** 敬語は大人になって勉強するものです。敬語を使う場面に立ち会うことによって少しずつ慣れていく。ところが、方言というものは基本的に家庭で話されるもので、外で話すものではない。すると敬語を学ぶ場がないわけです。ところが大人になってコミュニティの公的な場に出ていくと、先輩には敬語を話さないといけなくなる。習っていないのに敬語を話すと、当然間違えて怒られる。そうすると方言を話すのを止めて、標準語にしてしまう。そういう形で、方言に敬語さえなければ使えるという場面でも喋れなくなってしまいます。ただ、宮古の敬語表現はさほど難しくないので、少し練習すればよいのですが、その練習をする機会さえないので、その場を作ろうというのが先ほどの主旨です。

**質問者 2:** 書き言葉についてですが、池間の人たちの書き言葉というのはどのようなものなのでしょうか。

**田窪:** 書き言葉はありません。ただ、歌には作詞したものが残っていて、そこは漢字仮名混じりで書かれたりしています。そこでは音素をすべて書き分けてはいないですから、その部分を直して、すべての音が表現され、区別されるような表記システムを作りました。

**質問者 2:** とすると、たとえば先生が何かの資料をお持ちになって「標準語の書き言葉を池間の方言で話してください」と言う、それは可能なのでしょうか。

**田窪:** もちろんそれは可能です。全員がバイリンガルですから。書き言葉と話し言葉は違いますから、自分の話す言葉を書き取るというのは特殊な人です。ウチナー口はかなり書き言葉が発達していますから、書く人はたくさんいます。ただ、離島の言葉は基本的には書かれるものではありません。土地の知識人や大学の先生が辞書を作る際には書かれますが、書かれた文章を読むということは日常的にはないので、書く文化というのはそれほど発達してはいません。花城先生と三つの絵本を作りましたが、この作業はとても大変でした。先生は標準語で小説や児童文学を書かれますが、方言で書くことはそれほど多くないので、書き言葉を作るような感じでした。話してもらったものを書き起こすというのとは違って、物語や手紙、演説を書くのは別の行為なので、とても大変です。

**質問者 2:** 第二部をうかがっていると、先生お一人がたいへん苦勞なさっているという印象を受けるのですが、たとえばイギリスのSOAS (the School of Oriental and African Studies) のように、大規模に保存をするということではできないのでしょうか。

**田窪:** SOASは国ではなくて、個人がお金を寄付しているんです。SOASのアーカイブは、大金持ちの人が5億円か10億円かを寄付して、それで成り立っているんです。

**質問者 2:** たとえば国としてでも、大規模に日本の中にある危機言語を残していくという方法はないのかと思います。

**田窪:** 我々にしても、さまざまな機関からお金を貰っています。京都大学からも貰っていますし、科研費も貰っています。全部で数千万円を貰っていますので、これに関しては問題がありません。ただ、広めていく場合に問題がある。より問題なのは、録画したものをデジタル博物館にアップしたりするのは比較的簡単にできるのですが、プライバシーをクリアするのが本当にたいへんなんです。私たちは全員に書面で許可を貰っています。最初のテストで文章を読んでくださ

った仲間先生が、地域のコミュニティーにとっても信頼されている方なので、その人に保証してもらってサインをしてもらっています。他の地区では、自分を見せたくない、声の録音もしたくないという人が多いです。平良地区では80代でも話せなくなっているので早くしないと言語として消えてなくなってしまうのですが、許可が出ない。そうすると、いくらシステムを作っても広がっていかない。これがもう少し広がって、青森の人でも山形の人でも自由に出て、方言でおもしろい話をしてということがあれば「自分も出たい」ということがあるかもしれない。私の学生にフランス人がいますが、彼は若くてハンサムなんです。彼は天才的な言語学者で、宮古へ行ってすぐに方言を覚えて、行って3カ月で方言大会で3位になり、1年3カ月で1位になりました。テレビにも出て、先生と一緒に漫才もしているので、皆がスターになった彼に憧れている。そうすると、最初は彼が調査しているとおばあちゃんがぞろぞろとついて来ていたのが、若い人もちょっと方言を思い出して話そうという気分になっている。もう少し時間がかかるかもしれませんが、早くしないと消えてなくなってしまうので、急がないといけません。ただ、今はそれなりに楽観的です。

#### 註

- 1 発音表記は説明の便宜上簡略音声表記 [ ] と一部音素表記 / / で行う。方言間の比較と音韻変化の説明が必要なので、異音を表記しないといけないためである。長子音は長音記号 [:] でなく、[vː]、[sː] のように表記している。Nは、日本語の「ん」に対応する音 (の集合) であるが、日本語とは異なり、語末でも [n] や [m] で実現することがある。
- 2 Cは任意の子音をさす。
- 3 下地賀代子氏の説明による。下地 (2002) 「宮古多良間島方言の基礎的研究」千葉大学修士論文。

#### 参考文献

- Hayashi, Y. (2010). Ikema. In M. Shimoji & T. Pellard (Eds.), *An introduction to Ryukyuan languages* (pp.167-188). Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- O' Grady, W. (2014, November). *Jejueo: Korea's other language*. Paper presented at the 7th World Congress of Korean Studies, Honolulu, Hawaii.
- Pellard, T. (2009). *Ōgami—Éléments de description d'un parler du Sud des Rūykūy*. Ph.D Thesis, EHESS.
- ベラール, T. (2016). 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ホイットマン, J.・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語』 (99-124 頁). くろしお出版.
- 下地賀代子 (2002). 『宮古多良間島方言の基礎的研究』千葉大学修士論文 [未刊行].
- Shimoji, M., & Pellard, T. (Eds.) (2010). *An introduction to Ryukyuan languages*. Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- 田窪行則 (編) (2013). 『琉球列島の言語と文化——その記録と継承』くろしお出版.
- 田窪行則・ホイットマン, J.・平子達也 (編) (2016). 『琉球諸語と古代日本語』くろしお出版.